

---

# マスカレイド・ミミ

西崎想

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マスカレイド・ミミ

### 【著者名】

西崎想

Z5233Z

### 【あらすじ】

田の見えない少年、俊。

ミミは、その後を守りうと、他の星からやってきた。俊はいじめなどから、少しずつ成長していく。

ミミと俊は、スイーターマンの魔の手によつて、共に戦いの世界に身を投じていく。

## ■の言葉（前書き）

俊を、守ってください、  
私はやつ想つてこます。  
||||

## 星の言葉

星が言つ。

人は感情の生き物

と、

また、

星は言つ

生きなさいと、

力強く。

///は少年を見て、こいつ思つ、

かわいそつ……田が見えないなんて……、

少年の名前は、

俊。<sup>とし。</sup>

「俊、学校には……行かないの……？」

俊は無言……、

「ひ、嘘ね!!!!」

俊……外で、みんなと遊ぶ……事も出来ないなんて……

「俊、いい香りでしょ？？」

「は、俊に、香水を嗅がせた。

うなずく、俊。

「これ、お母さん香り」

俊は言ひ。

「そう、よくわかるわね、俊

「は嬉しい。」

俊は、何かを持っている。

それを、狙うやつらがいる……

それから、

私が、守る。

## 仮面舞踏会

俊は目が見えない代わりに、他の機能は人より発達していた。  
///は彼に、何かを掘んでほしかった。

///は、違う星から来た。

そして、///と一緒に、悪いスイーターマンといつも、いつもひりも、や  
つてきました。

そして、それらは、///にコンタクトを取つて來た。

///は、スイーターマンの事は「関係ない」とタカをくくつてい  
た。

しかし……

「俊？」

今までいた、俊が何処かに行つてしまつた。

///は心配になつた。  
外は危ない。

///が俊の家の外に出た。

その時だつた。

空間が歪む。

こんな経験は、今までなかった。

困惑する//。

田を開けると、

そこは、パーティー会場

仮面をつけて、ドレスアップした人たちが踊っている。

人？

いや、

スイーダーマンたちだ。

「俊！」

//は俊を探した。

すると、スイーダーマンは、//に剣で、突き刺そうとした。

キイン……！

//は、自分の武器、「魔法の杖」を出して、応戦。

「俊！ いるの？ ビコなの！ ？」

//は叫ぶ。

俊は、//に駆け寄った。

「///...」

「俊！大丈夫だった？」

「うん.....でも、ここ、どこなの？」

俊は目が見えない代わりに、空気の流れを読むことができた。

「なに？この.....すえた臭い」

「すえた？」

「うん、こんな匂い初めて嗅いだよ」

スイーターマンが、///から俊を奪おうとする。  
///は、杖で、スイーターマンを刺した。

「キファア.....！」

そう叫んだ、スイーターマンは、破裂した。

「俊！こっちよー！」

俊の手を掴んで、///は走った。

そして、

「星よ、輝きたまえ！」

杖から、何かの気流が生じる。

「アクア・サイクロン！」

幻の水が、スイーターマンを流していく。

空間が歪んだ。

「俊！」

そこは、俊の部屋。

俊の手を握んでいたミミは、安堵のため息を吐いた。

「もう、大丈夫よ。俊」

「うん、ミミ」

## 俊の事

「は、長い髪、赤い髪。背は155?くらい。」

「は、未来風の服を着ている。」

俊は、14歳、登校拒否の傾向がある。

「が聞く、」

「俊、学校に行かないの?」

俊は、黙つてうなずく。

「友達……心配してると?」

すると、俊は、

「友達なんて、いないよ」

「俊……友達、君の事、見てるよ?」

「僕は、暗闇だから、分かんない」

「それでも、君の事、見ててくれているんだよ」

「僕は、学校にいるとき、いじめられた、もう、いいんだ」

「は、じつは、ここにいるのが、迷う。」

いじめ。

それは、優しい俊に当然の様に付きまとひ、試練だ。俊は、優しいあまり、他の子より引いてしまひ、

それが、泣き虫の俊を”いじめ”と言ひ、他人からの、構いを生む。

そうして、俊は、不登校になつていく。

「//」も行くから、一緒に行くから、……いじめへ

俊は、嫌な顔をした。

そうだとほ、//もわかつっていた。

俊は、”引きこもり”なのだ。

俊は、一人で、音楽を聴きだした。

「音楽……好き?」

俊はうなずく。

その時、

空間が歪んだ。

「あつー。」

「は驚きの声を上げた。

スイーターマンがドレス姿で、踊る。

舞踏会だ。

手には、剣を。

「俊！」

どこかに行ってしまった、俊を慌てて探し出す。

スイーターマンが、元に切りかかった。

する。……

「は、素早い動きで、攻撃をかわす。

俊一。

「俊一。」

俊がスイーターマンに抱えあげられてくる。

「俊一。」

「が叫ぶ。

「俊を、放して！」

そう言って、///は魔法の杖を出す。

キイン……！

スイーターマンの攻撃を杖で受けれる。

「星の輝きよ！」

///の攻撃は、水、火、使える。

今度は、火。

「ファイア・ボール！」

///の攻撃は、目で見ないと、通用しない。  
俊、には、通用しないのだ。

幻の、火が、スイーターマンを襲う。

空間が歪んだ。

「俊、大丈夫だった？」

俊は黙つて頷いた。

///は、ほつとして、俊を抱きしめた。

## 心開いて

俊は後を気遣う。

俊の里へ、俊みたいな子供が連れ去られて来るから。

なぜか、俊みたいな子を、スイーターマンの組織、ドレイカ帝国は、集めている。

阻止しなければ……俊を守らなくては。

俊は、少しざぶだが、がむこてあげるかい

俊はうなずく。

俊は、少しざぶだが、がむこてあげるかい

俊の事を気遣う」ともある。

「俊、半分こして

「俊、くれるの?..

俊はうなづく。

俊が、外へ出ると玄へ出した。

俊は喜ぶ。

「私につかまつていれば大丈夫」

そう、//は言った。

外へ、

外は、車が通る。自転車もだ。  
俊はゆっくりとだが、前に進む。

「僕、この道、前に歩いてたから」  
俊が囁つ。

家の周りを、一周して、

帰ること……、

と、そこで、

空間が、歪んだ。

マスカレイド。

これは、そういう場所だ。

また、俊がない

「俊一！」

また、連れ去られてしまうのか……？

三三三は荒てた。

「」

俊が三三の所に駆け寄つた。

「俊！ よかつた……」

は俊を抱きしめた。

少し赤くなる俊。

「帰るつゝ俊と一緒に、うなづく俊。

ミミは、魔法の杖を使った。

空間が歪む。

さつきいた、道に戻る二人。

「帰る、俊」

俊は、///に抱き着いた。

「と、俊……？」

「帰る、///」

さつき、俊は言った。

## 学校について

「俊、学校について。」

「は、俊を学校に連れて行った。」

俊も、元気の出てきたころみたいに、

ざわざわ、

小学校はにぎやかだ。

俊はの腕にかきついていた。

担任の先生に会った。

静かな、女の先生だ。

俊の事は、よく知らない。

それはそうだ。

俊は学校に行っていなかった。  
無理もないことだ。

しかし、早く俊の事を知つてもらいたい。

はそう思っていた。

教室にも行つた。

ガキ大将みたいな子がいて、俊を構つてくれた。  
"いじめ"ではない。

もつと、「俊の事を知りたい」そんな風だった。  
優しい、親切な子だった。

学校の帰り道、  
ミミが聞いた。

「俊、今日は良かつた？」

「うん！」

俊は、元気よく、ミミに言った。

ミミは嬉しかった。

今日は空閑は至まなかつた。

夕飯を、一緒に食べた。

俊の、お母さん、お父さん。  
そして、妹。

彼らと、ミミは大分慣れていた。

///は、居候。

それを、両親は、許してくれている。

///は、こなんいい家族で、俊は幸せだと思っていた。

## 一人のマスカレイド

俊は、中学校に行き出した。

次第に、俊の口数も増えた。

///も学校までは付き添う。  
しかし、もうそこまで。

学校に見送った後は、///は帰った。

俊が、そうしてくれと、

言った。

///は嬉しかった。

これで、スイーターマンのマスカレイドがなければ……。

俊のお母さんが買ってくれたのだ。

///はありがたく思つ。そして、今日も洋服を着ている。

かわいい服。

///に似合つと、買っててくれたのだ。  
も、家事を手伝っている。  
感謝の気持ちだ。

そして、学校が終わった。

迎えに行いつと、思つたとき、

空間が、歪んだ。

田の前が、眩むよつな、変な感覚。

俊は……？

一緒にいなかつたので、舞踏会にはいないのか？

「俊？」

仮面をかぶつた、スイーターマンが、///切りかかった。

それを、魔法の杖で、迎え撃つ。

カキーーン……。

シャリッ……。

何回か重ねあつた。

///は、

「星よ、輝きたまえ！」

そういふと、

「アクア、サイクロン！」

そう叫んだ。

破裂していく、スイーターマン。

そして、世界から、解き放たれた。

「///-」

「……俊？」

俊は、目の見えない代わりに、匂いでわかる。

俊は、倒れていた、///を必死で、呼びかけていた。

「俊、ごめんね。///、大丈夫だから」

俊は泣いていた。

///は、俊を抱きしめた。

俊が、怪我をして帰ってきた。

///は驚いて聞く。

「どうしたの？」

すると、俊は泣き出した。

……」「どうしたんだ。

俊が、クラスの子に突き飛ばされたのだ。  
明らかに、「悪意」があったか、  
クラスの子らは、「あつた」子と、「なかつた」子の二種に分か  
れた。

しかし、悪意はないようで、あつたのだ。  
明らかに、悪意ではないのか。

その子は、名前を、守君まもるくんと書く。

その子は、俊を、じつと見ていたといふ。  
なにを、そんなに見ていたのか……？

それは、分からぬ。

しかし、俊は言った。

「電流の流れるものを、腕に当てられていた」と、  
悪意は、あつた。

だが、学校では、俊は言わないでの、真相は謎に包まれた。

「////と、守君に言つて行こつか？」

そういうが、俊は、絶対にやめてと、強く拒否した。

////は、俊を心配する。

が、俊は、次第に友達を作つていった。

「俊、よかつたね」

////は、心から嬉しそうだ。

次元が歪む事は、最近ない。

スイーターマンの事は、謎に包まれたままだ。

しかし、俊に、何をしようとも、

////は、俊を守る。

もう思っていた。

## 守君

守君を見に、//が学校に行つた。

担任の先生によると、

守君は、あんまり他の子ともうまくやつていらないらしい。  
「あんまり、彼を責めないでほしい」と、先生は言った。

//も、そういうふうに思つていた。

教室に行くと、守君が、俊をいじめていた。

あの、電流を流すといつ機械を俊に当てる。

「俊！」

//は慌てて駆け寄る。

「わーい、女に守られてやんのー」

そう言つと、守君はあっかんべーをした。

「ほ、僕は、守られてなんかつ……」

俊は泣き出した。

「うひーー守ー俊に謝れ！」

ガキ大将の一括で、なんとか、この場は収まつた。  
が、

俊は、その後、守君の事を、気にしだす。  
守君との別れも、知らず。

学校へ、

俊は、「離れて」と書ったので、俊は遠日。

「じゃあ、私も帰るわね」

そう書いて、俊は学校を後にして帰った。

その時、

！？

すべてが暗黒に包まれた。

俊は立ち止く。

しかし、俊の事を思つた。

「俊」  
「...」

俊が、この所に駆け寄つた。

俊も、この世界にいるようだ。

「またか」「へへへ」

俊が書つ。

「ええ」と、///。

そこに、仮面をかぶつた、人が寄ってきた……。

背は低い。

///がそれに、魔法の杖をかざした。

スイーターマンの仮面が割れた。

「！？」

それは、

「守君ー！」

///が駆け寄る。

倒れた守君を、俊が抱きかかえた。

「守君ーどうして……？」

俊が言う。

「僕、人に……仮面をかぶせられて……」

ごふつ……

血を吐く守君

「いじめて……ごめんな、俊……く

守君の幼い手が、力を失つた。

「守君！」

もう、動かない、その、うつむかな目。

俊は、守君の、顔が見たい。

そう思つた。

悔しがる、俊。

「くつそーーー！」

光が……

俊に、光が、そぞぐ。

俊は目を開けた。

「俊ー！」

「////……君の顔が」

やつと……見えた、

「俊！見えるの？見えるのね？」

「が俊の肩を持つ。

「うふー...」、「痴つて可愛いな」

「はは、やの言葉に照れる。

「守君はー？」

俊が、そう言つて、守君を見た。

守君はもう、すでに息絶えていた。

「...くそう」

俊が、歯を食いしばる。そして、立ち上がつた。

「スイーターマンめ！僕が相手だ！かかってこいー。」

そう、叫んだ俊を、ははドキドキして見つめた。

「ヒ、俊...」

辺りは、眩しくなり、舞踏会が始まった。

俊は、スイーターマンに、怒りの鉄槌をかました。

「さつー！」

スイーターマンは、煙を出して、消滅した。

「いい！僕が全員倒してやるー！」

俊はそう呟えた。

「//は魔法の杖で、スイーターマンを突く。

シャーネン！

綺麗な音を出して、スイーターマンは消滅した。

「俊！貴方は田をつむつて！」

その声に、俊は田をつむつた。

「アクア・サイクロン！」

幻影の水が波を立てる。  
スイーターマンは消えていく。

空間が歪む。

「//は……？」  
そこは、森の中。

「俊……」

「//は、田を見開いて言った。

「//は、スイーターマンに滅亡せられた、私の星……」



強く……

森の中、辺りは暗い。

///は、俊に、

「この世界は闇に閉ざされたの」と言つた。

「僕、田が見えるのに、こんな光景、見たくない」

「俊、はっきり見えてるの？」

俊は「うつくりと、うなずいた。

「僕、5歳で、毒を被つてしまつたんだ」

「そうなの……」

///は、俊の頭を撫ぜた。

「僕、スイーターマンを倒したい」

「俊……」

///は感動した。

俊はこんなにも頑張つてゐる。

「どこに行けばスイーターマンに会えるの？」

///はゆつくりと、

「……このまま、森は出なけば」

「そうなんだ」

///と、俊は、歩いた。

この世界は悲しそう。

そう、一人とも思つていた。

///は、魔法の杖を出した。

ポウ……

魔法の杖の先が光った。

「これで、少しは……」  
明るい気分に……。

そう、///は思っていた。

「もう、僕は大丈夫、///、僕は強くなるよ

「俊……」

///は俊の手を取った。

「行こう、///」

俊はそう、言つて、///の手を強く握り返した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5233z/>

---

マスカレイド・ミミ

2011年12月27日20時51分発行